

早稲田大学図書館における

資料保存問題の経緯と展望

はじめに

早稲田大学図書館は明治十五年（一八八二）、東京専門学校図書室としての開創以来百余年を閲し、現在までにおよそ百五十万冊の蔵書を数えるに至っている。この中には国宝二点、重要文化財四点をはじめとするかなりの貴重資料や、いくつかの特色あるコレクションを含んでいる。

これらは言うまでもなく、数多くの先人たちの営々たる努力によって収集・構築されてきたものであり、その

早稲田大学図書館における資料保存問題の経緯と展望

松 下 真 也

すべてが、貴重な大学の財産であるといえるだろう。今後ともこれを継承し、さらなる発展と充実を計ってゆくことが、我々の大きな責務であることは論をまたない。

本年（平成二年）、早稲田大学図書館の新館が竣工する。全館ほとんど開架式で、利用面に重点を置いたインテリジェント・ライブラリーとしての設計がなされており、最終的に四百万冊まで収蔵可能な、有数の規模をもつ大図書館となる。このときにあたって、我々のなすべきことは次の三つに要約されよう。

(一) コレクションの一層の充実をはかること

(一) 資料の保存・保全に万全の措置を講ずること

(二) 利用者の要望を的確に把握し、それに最大限応えること

現在、このうち(一)と(二)については、すでにかんがりの具體的方策が建てられ、実績も上りつつあると言つてよい。すなわち収集面では、これまでにない大幅な寄贈圖書の受入れや、いくつかの貴重なコレクションの購入をおこない、きわめて積極的な蔵書構築が進行中である。

また(三)についても、図書資料にかかわる部門の全員が利用にもかかわる体制、全館的なオープン・アクセス、また学術情報システム「WINE」の構築、ネットワーク化と週及入力 of 推進により、もとよりその道は平坦とは言いがたいとしても、将来的な展望がひらけつつあると言えらるであらう。

問題は(二)の資料保存対策である。いわゆる酸性紙問題に端を発して、「資料の危機」が叫ばれて久しい。わが図書館においてはこれまで、この問題に正面から取り組んできたと言いがたいが、しかしたとえば館蔵貴重書

の影印刊行事業や、明治期刊行物のマイクロフィッシュ化事業を発足させてきており、また「完全原形保存」のモデルケースとして、「稲門ライブラリー」の構築に着手してもいる。ただ、資料全般に対する一貫した保存対策・政策に関しては、いまだ今後の課題として残されているというのが実情である。

本稿では、いわゆる資料保存問題の今日的狀況を概観した上で、早稲田大学図書館における資料修補の経緯について略述し、あわせて今後の展望についても、若干触れてみたいと思う。

一 資料保存問題の今日的狀況

一般に図書館の大きな機能の一つは、先人の遺した文化遺産を守り、後世に伝えることである。

しかし同時にまた、持てる資料を利用者に公開し、十全な利用・活用に供することも、図書館の重大な機能であり、使命でもある。

この二つの機能は相反する関係にあるにもかかわらず

ず、この両全を得ることこそが、図書館のとるべき道であると言わざるを得ない。これは、大変に難かしい問題である。だが学問研究の府である大学図書館において、とりわけ「学の独立」と「進取の精神」を標榜するわが早稲田大学図書館においてはとくに、利用と保存を両立させることが必要なのである。いうまでもなく、資料は徒らに死蔵されるのみであってはならないし、また無原則に放置して劣化するにまかせてもいけない。そこにはおのずから、図書館で働く我々一人一人の資料に対する知識、センス、そして愛情が要求される。

今日いわれる資料保存問題は、周知のごとく、アメリカ議会図書館等で酸性紙に印刷された資料の大量劣化という状況が起ったことに端を発している。むろん、いつの時代でも、虫かびや災害による資料の劣化は図書館人を悩ませてきた。しかし、外在的な因子だけでなく、資料そのもののなかに劣化因子が含まれていたという事実、保存という問題がいかに根本的な、文化の構造そのものを問うような性質をもった問題であるかを我々に改

早稲田大学図書館における資料保存問題の経緯と展望

めて思い知らせ、資料保存問題はまったく新しい局面に入っているのである。

今日における資料保存問題は、以下のような諸要素を包括するものとしてとらえられよう。

(一) 資料そのものの修補・修復

- ① 修補（裏打ち、虫損補修等）
- ② 製本・裱具
- ③ 脱酸化

(二) 資料の保護・防護

- ① 帙、保護箱、保護シート等の作成
- ② 虫菌害対策等

(三) 資料収納環境の整備

- ① 書庫・収蔵庫の設備・管理
- ② 閲覧室の設備と管理
- ③ 展示室の設備と管理、展示方法
- ④ 災害対策

(四) 他の媒体への移行

① マイクロフィルム化

② 影印出版、複製作成

⑤ 図書館員の訓練

① 書誌学的知識の修得

② 保存科学に関する知識の修得

⑥ 図書館の政策

① 収書方針

② 保存計画

③ 利用規程

④ 予算措置

⑤ 業者の選定

⑦ 図書館間の相互協力

① 分担収集・分担保存

② 保存に関するプロジェクト

③ 研究・教育

平成二年三月二十八日、国立国会図書館新館講堂に於て、「第一回資料保存シンポジウム——蔵書の危機とその対応——」が行なわれ、筆者らも参加した。国立国会

図書館は昨年、IFLA（国際図書館連盟）保存コア・プログラムのアジア地域センターに指定され、これを契機として「保存協力プログラム」を実施することとなったが、その活動の一環として行なわれた催しである。同館が、本年を「保存元年」と呼び、わが国の資料保存活動の一大センターとして活動を始めることは誠に喜ばしいことである。とはいえ、第一回のシンポジウムに参加したかぎりでは、サブタイトルのうち「蔵書の危機」についてはまことによくわかったものの、「その対応」については、必ずしも具体的な展望が得られなかった。ことはそれほど根本的かつ複雑な要因のからんだ問題であるともいえるし、また、結局はわが国の対応はきわめて遅れており、国家的規模での政策が不在なのかという印象も持った。

とりあえず資料保存問題を考える上で、以上述べてきたことを視野に入れておくとして、具体的な問題にうつろう。

二 資料の修補と保存対策

修補 (restoration) とは劣化した資料をなんらかの方法で補強し、その資料の原形を保存しようとする作業をいう。

たとえば虫に喰われて穴のあいているものがあれば、その穴を塞ぎ、カビ等に侵されて脆くなっている資料があれば裏打ちをする。製本のかがり糸が切れたり、弱くなっているものは、綴じなおし、かがり直さねばならない。つまり、書物などの資料が世に出た時のままの形 (原形) を損わぬように注意しながら、外形を整えなおす作業が「資料の修補」である。

この「原形の保存」ということは、ほとんどの場合、一義的に重要であり、修補作業の大原則である。従ってこれには、個々の資料に対する厳密な書誌学的考証が前提となることはいうまでもない。たとえわずかでも、修補作業の際に原形を変更する場合には、そのむね、きちんとした記録を残すべきである。

早稲田大学図書館における資料保存問題の経緯と展望

たとえば一例をあげると、最近、故坪田譲治氏のご遺族から、童話雑誌「びわの実学校」全巻のご寄贈をうけた。昭和の児童文学研究の上で、きわめて貴重な資料であるが、これの製本が、ステープル (いわゆる「ホットキス」のこと。ホットキスは商品名なので、ステープルと記す) 綴じだったのである。ステープルは簡易製本によく用いられるが、きわめて短い年月のうちに錆びて、資料劣化の原因となることはよく知られているよう。そこで我々は、百冊以上あるその雑誌一冊一冊について、まだあまり錆びていないステープルをはずし、改めて糸綴じにする作業をおこなった。用いた糸は「太白」という商品名の太めの絹糸である。改綴した雑誌は七、八冊ずつまとめて帙に収め、各帙の見返し部分に、もとはステープル綴じであった旨、記しておいた。ステープルにかぎらず、金属製のクリップや輪ゴム、セロファンテープなどが用いられている場合、すべてとりはずすことが必要である。

さらに、もう一つ例をあげてみる。本館特別図書な

かに、二葉亭四迷旧蔵のロシア語の本が何冊かある。明治四十一年、朝日新聞社特派員としてペテルブルグに赴いた二葉亭が、現地で買った書籍類である。それらの中には、仮製本アンカットのものがいくつかまじっており、中に一冊、途中まで（恐らく二葉亭の手によって）ペーパーナイフでカットされている本があった。

あるとき閲覧利用者がきて、この本を閲覧していたが、続きを見たいので全部カットしてほしい、と申し入れてきた。もっともな申し出である。しかし二葉亭四迷の研究者にとっては、二葉亭がこの本をどこまで読んでいたか、というようなことが、案外研究・考証の対象とならないともかぎらない。そこで我々は、もともと何頁までカットされていたかを記録した上で、全頁をペーパーナイフでカットし、閲覧に供した。

余談になるが、仮製本アンカットの本というものが存在するのは、一六八六年、フランスのルイ十四世が「印刷・出版業者と製本業者は、お互いの職分を超えてはならない」という勅令を出したことによる。それ以来、仮

製本アンカットの形で本は売られ、それを買った人が製本家に製本を依頼するという、ややこしいスタイルがヨーロッパで定着した。十九世紀以後、版元製本が徐々にそれにとってかわり、今日に至るわけであるが、今でもフランスを中心に、文芸書や美術書などの一部が、仮製本のまま出版されており、この遺風を保っている。

多くの和漢古書や古文書などの中には、いつ、誰の手によってとも知れず裏打ちがなされていたり、明らかに後補したと思われる表紙や題箋がついているものがある。しかし、その記録がのこされている例は、残念ながらあまりない。

図書館の所蔵資料を修補するにあたっては、当然のことながら、資料一つ一つに対して、具体的な、きめ細かい対応が必要である。ある一つの資料に対して、修補を行なうかどうか、どのような修補方法をとるか、専門家に依頼するかどうかといったことを決定するのは図書館員である。従って、その判断を誤ると資料の生命をうばうことにもなるのであり、慎重な対応が必要なのであ

る。

和漢古書の修補の内容は、主として裏打ち、虫損補修、製本補修の三項目に要約される。これらは、わが国の文化伝統の上では、書画などを掛幅装や卷子本、法帖、扇額などに仕立てる技術、「棧具」とか「裝潢」などと総称される伝統工芸技術と大きな関わりを持っている。

宮内庁書陵部や国立国会図書館などには、修補専門の部署があり、棧具の専門技術を有する人が資料の修補にあたっているが、早稲田大学図書館では、そのような人員の余裕がないこともあり、これまで修補のみを取扱う部署は設けられたことがない。新館にも予定されていない。ただし、一時、特別資料室内でアルバイトを雇って修補作業を行っていたことがある。昭和五十年から五十五年頃までのことで、宮内庁書陵部の修補室長であった遠藤諦之輔氏の指導を受けた元館員、松本弘氏が中心となっていた。これは、緊急に修補すべき資料がたくさんあるのに、外注する予算がなかったため、やむを得

ずとりかかったものである。主として、当時整理中であった漢学者服部南郭家の家伝資料である「服部文庫」の中にあった虫損本、冠水本や一枚物資料の裏打ち・製本を行なった。たまたまその時期、筆者も特別資料室に在籍していたので、裏打ちや和書の製本の仕方などを覚え、当時整理を担当していた幕末・明治の一枚刷メディアのコレクションである「西垣文庫」に含まれる資料のいくらかを修補したことがある。

当時行なっていた裏打ちの方法は次のようなものである。

①平らな、傷のない、広くて厚い板（棧材）の上に、渋紙（厚手の和紙に柿渋を塗って天日に乾かしたもの）を水貼りし、刷毛で十分しわを伸ばす。

②渋紙の上に、裏打ちすべき原資料を裏返して置き、水貼りする。紙は、水をふくむとのびるので、ていねいに刷毛でなでつけ、その伸びが中心から各方向へ均等であるようにする。原資料にしわができぬよう注意する。

③原資料の裏に糊刷毛で糊を引く。

④その上へ、裏打ち用の紙（薄手の美濃紙など）をのせる。このときに原資料と裏打ち紙の目の方向が同一となるよう注意する。のせたら水刷毛で、中央から周辺へと放射線を描くように手早くなでつけ、びったりくっつける。

⑤渋紙ごと台板からはがし、別の板の上に渋紙を上にして貼りつける。しわが寄らぬよう刷毛でなでつけてから渋紙のみはがし、一昼夜おいて乾かす。

この方法は、素人でも比較的簡単に覚えることができる。き、何か月か続けていると、結構上達するものである。ただし、原資料を水貼りする際、しわを作らないためには、かなりの熟練を要することもまた事実であって、虫害やかび害のあまりにひどいものを、いきなり素人が手がけることは無謀といえる。また、素人でも出来るとはいっても、人により適性かなりの差があるのは否めない。

材料の吟味も重要であり、なによりも経験を要する。たとえば糊の濃さひとつとっても、その日の天候によつ

て微妙に変えることが必要であるという。更に、裏打ちしたものを製本する際に、まず正確な裁断を行ない、しかるのちにきちんと揃え、正しく丁合をとってから、こよりで中綴じをしなければならぬが、じつはこれが裏打ち以上かなりの熟練を要する工程である。

それにしても、びっしりと虫喰いだらけで、開くことさえままならなかった古書が、これで何冊も何冊もよみがえってゆくのを目にするとき、人はやはり一種の感動を覚える。「修補前」と「修補後」の写真をとって、並べて見せたい思いにかられる。じつはそこに、一つの陥穽があるとも言えるのだが、ともあれ古書を扱う図書館員は、一度は裏打ち作業を体験してみるべきである。漢籍や近世史料の講習会などでも、宮内庁の小関豊氏らによつて修補実習が行なわれているが、自分で刷毛を持って、この作業にとりくんでみると、資料のたいせつさ、かけがえのなさが改めて実感できる。

けれども、図書館員が修補作業をおこなうことには危険性もおおいにある。というのは、もともと手仕事の好

きな人がこれをやると、のめり込んでしまい、本来の図書館業務をおろそかにしてしまいがちな上に、修補そのものも、ついやり過ぎて、「過ぎたるは及ばざるが如し」という結果になることが、往々にしてみられるからである。

いささか忸怩たるものがあるが、筆者の経験を記そう。裏打ちの技術を知ると、とりあえずなんでもかんでも裏打ちしたくなる。たとえば、虫喰いのはげしいものほど当然難しく、年季を要するのだが、そういう困難そうなものにこそ挑戦したくなるのである。「西垣文庫」の一枚物資料の一部は、いわば実験台にされたようなものであった。筆者は高田早苗、徳富猪一郎ら著名人の自筆書簡を裏打ちし、それをつなげて巻物まで作った。(文庫二〇——八八二七)以前、宮内庁書陵部の遠藤氏に依頼した『大河内文書』(ヌ六―七一五六。高崎藩主大河内輝声による中国人との筆談録。もと冊子体であったものを卷子本に改装)の巻物をお手本にして作ったのである。幸いにして、大失敗こそ犯さなかったが、小さな失敗はか

なりある。いま、冷静な目で、当時行なった修補の状態を見ると、やらずもがなのものがかなりある。

結局、やはりこれは、その道の(稜具の)専門技術者が、二十年も三十年も、長い年月をかけて修業するだけのことはある、大変な仕事であって、いかに適性のある図書館員といえども、片手間にこなしきれぬ性質のものではないといえよう。

やはり図書館員の本務は、資料の劣化度に応じ、その最もふさわしい修補の仕方を判断して、最も信頼できる修補業者に依頼するところまでであろう。新図書館の中に、簡易な修補作業のできるスペースを作らねばならないという意見に筆者は賛成ではあるが、やはりその前提として、資料のよくわかった指導者の存在が不可欠ではないかと思う。

同様のことは洋書についてもいえる。洋古書の修補については、アラビア、ビザンチンに起源をもち、ルネサンス期以降のヨーロッパで行なわれてきた伝統的工芸製本 (reliure; bookbinding) の技術と歴史に関する理解が

不可欠であり、大前提である。しかしわが国の製本業界では、産業革命成立以降の版元製本の方式を明治初年にまなび、それを踏襲して来ているために、洋古書の正しい修補は、国内ではほとんど不可能な状況となっていた。本館にある洋古書の中には、もとは革製本であった筈のものが、雑誌の合冊製本と全く同仕様のクロス装で装丁され、しかもごていねいに本文の天地がかなり裁断されてしまっているものが見うけられる。また、革を用いてはいるのだが、書誌学的に言ってその資料の原装とはどうしても見なしがたい、製本業者による恣意的な装丁が施されてしまっているものもある。

もっともこうした傾向は、ひとり早稲田大学図書館のみとはかぎるまい。国立国会図書館においてさえ、かつて修補の名人とうたわれた人が、原装とは明らかに異なる、いわば独創的な装丁をおこなった「作品」が遺されているし、古書店や古書市を歩いてみると、国内でか国外では知らぬが、首をかしげたくなくなるような装丁を施された古書がやたら目につく。

十年以上前、栃折久美子氏の啓蒙的な著作がきっかけとなって、「ルリユール」とか「手づくりの本」というのが一種のブームになったことがあった。そのときに、「ヨーロッパでは本を一冊一冊、自分の好みにあわせて製本します。何と優雅な趣味でしょう」というように一般には話が伝わり、ヨーロッパの伝統工芸そのものが、やや誤解されて伝わったのではないかという気がする。もとよりそれは栃折氏の本意とするところではなかったであろう。仮製本アンカット本のところで前述したように、製本家が独創的な装丁を施してもいいのは、現在、売られている本についてのみであり、古書の修補にあたっては、独創は許されない。それに代るに、厳密な書誌学的考証をもってしなければならないことは当然である。

いささか遅きに失した感はあるが、早稲田大学図書館では、昭和六十三年十二月の課長会合宿において、次のような方針を申し合わせた。

書誌学上「原装」と認められる図書については、たとえいかに傷んでいても、これを改装せず、部分的修補にとどめるか、または修補せず、保護函に収納して保存する。

原則はこれにつきる。ただ、図書館を利用する研究者のなかには、「テキスト中心主義」と称すべき人々もいるであろう。そうした人々にとっては、書誌学上の原装云々などは関心の外であり、改装によって本が使用に耐え得るようになるなら、むしろ改装すべきだと主張するかもしれない。前述した図書館の機能を考え合わせるなら、こうした意見も無視はできない。

だから、改装してもいいのである。要はその記録をきちんと残しておけばいいのだ。そのため、筆者はここで、和漢洋を問わず古書を修補する際には、一定のフォーマットを持つカルテを作成しておくことを、担当する図書館員の基本的業務として位置づけるよう提案したい。必要なら修補前、改装前の状態を、写真にして残し

ておくことも有効であろう。いま、MARCフォーマットの全国的標準化が問題となっているが、できればこうした「修補カルテ」のフォーマットについても、全国的な標準化がはかれればと思う。

現今の図書館界においては、ともすれば情報操作をもってハイレベルな仕事とみなし、修補だの裏打だのと言うと変人に思われる傾向がある。早稲田大学図書館においても、そのような傾向をなしとはしない。もともと、書誌学とは、本を具体的な「もの」としてとらえる立場であるはずである。資料保存問題が、「もの」としての書物の劣化から発している以上、修補の問題は、つねに図書館員が気につけ、注意を怠らぬようにすべき問題であると思われる。

しかしながら一方では、図書館員がいかに書誌学的知識に精通し、修補の問題を気遣ったとしても、どうにも現実には解決のつかぬ問題がある。それは、修補にはお金がかかる、かかりすぎるといふ問題である。たとえば、和本一丁の裏打ち単価は、業者によって差はあるに

しても、平均千円前後であろう。約五〇丁で一冊とみると、製本仕立代を勉強してもらうとしても一冊五万円となり、百冊の修補に五百万円かかってしまう。修補を要する本は、全館で百冊や二百冊ではない。千の単位、うかうかすると万の単位だ。

かつてのように、館員がバケツに水をくみ、エプロンをかけ刷毛を手にして、自館修補を行なうと仮定しても、その人件費で修補の丁数を割れば、まだしも外注の方が安いのではないだろうか。洋古書にいたっては、一冊五万円ですむ修補というのはまず考えられない。

最近、裏打ちにかわるものとして、ヨーロッパを中心に、「溜め漉ぎ」の技法を応用した「リーフ・キャスティング・マシーン」なるものが普及しはじめており、日本でも発売されている。これは、原資料に紙を一枚余分に貼りつける裏打ちと異なっており、虫損などの穴にのみ紙の繊維が入ってゆくので、仕上りの厚みが原資料と変わらないという特徴がある。

こうした新技術への対応や、脱酸化の問題なども含め

て、修補の問題は、一図書館、一文書館単位で考えるのではなく、図書館界全体、さらには古書業界、洋書輸入業界も包含した共通の問題としてとらえ、全体としての対策を考える必要がたしかにある。ただ、その出発点ともなり帰着点ともならねばならないことは、やはり依然として、資料をあずかる図書館員の資料に対する態度のありようではないかと思われるのである。

大学図書館は資料保存問題に対して、全く何の対応も示していない、という指摘がある（細野公男氏「図書館資料の保存とその対策」、論集・図書館学研究の歩み・第5集、一九八五年十一月）。資料保存問題に関心のある図書館員はふえつつあるが、いずれも個人のレベルで終っており、大学図書館は相変らず「システム化」以外の理念を持つとうとしない、とその指摘が続いている。たしかに、早稲田大学図書館においても、資料保存問題に本当に関心を持っている館員は、恐らくほんのわずかであり、しかも組織されていないから、個人レベルにとどまらざるを得ないでいる。はつきりいって、じつに歎かわしい状況で

ある。なんとかこの状況を、そして館員の意識を、徐々にでもよいから変えてゆかねばならない。日本の図書館で資料の劣化度調査を実施しても、アメリカのような極端な結果はまだ出ていないし、フィレンツェやブカレストの図書館のように、天災や人災に見舞われたわけでもないから、現場に危機感がさほどないのかも知れない。それにしても、資料の大量劣化が起きてからでは、もう遅いのである。

だが大学図書館が、資料保存問題についての対応を示し、理念を持つとは、具体的にはどういうことを言うのだろうか。要するに資料保存専門の部署を設置して体制をととのえ、それに見合うべき予算措置を講ずる、ということだろうか。

英国図書館などでは、保存・修補部門に何百人ものスタッフを擁し、資料の購入予算と規模の等しいほどの予算を、保存のために計上しているとも聞く。たしかに、わが国の大学図書館が、たとえばいままでシステム化のために計上したくらいの予算を保存対策のために投入す

ることができれば、大量修補も、大量脱酸化も可能であろう。しかしながら、わが国におけるここ二十年ほどの図書館界の動きをふりかえると、やはりシステム化こそがつねに第一の課題であったと思う。早稲田においても然りである。システム化はまだ完成の域に達したとはとてもいえない。加えて、大学の経営危機から必然的に導き出される人員の削減（もしくは抑制）という問題もある。我々には選択肢はすくないのである。といって資料保存問題は、もっぱら精神力で解決する、というわけにもいかない。「正しい書誌学的知識にもとづいた修補」をまず実現するために、資料そのものに対する館員の知識と経験を高めるよう、他のいろいろな問題とバランスをとりながら、地道な努力を積み重ねて行くことが重要であると思う。

（まつした しんや 図書館整理一課長）